

国交省は、将来的に関屋分水路の流量を毎秒3200トに増強する考案で、同事務所の田辺維司海津課長は「150年にも一度という規模の洪水でも安全に流せるよう工事を進める」と説明する。

屋敷馬場跡地に移り住んだ。移転を経験した鈴木忠男さん(72)は「あちこちで住宅が建てられ、くきを打つ音が響いてきた。関屋分水路の工事の作業員もたくさんいて活気があった」と懐かしむ。

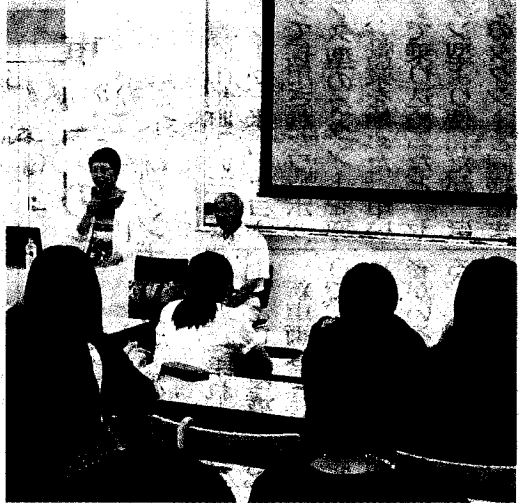
× × 関屋分水路の整備は1965年に開始。事業計画の地域に暮らしていた693戸が、関

見学会を実施する。発案したのは、1958年から地元に住んでいる吉田幸二さん(80)。毎朝、土手沿いの遊歩道を散歩コースにするなど、愛着が深い。

吉田さんは「関屋分水路に関心を持つている人は地域でも多くない。見学会を通じ、地域を水害から守っていることを知ってほしい」と話した。

薬物依存怖さ知って

市内の大学など連続講演



薬物依存症防止の講演会で、覚せい剤などの怖さを訴える小西さん(左奥) 〓新潟市北区

大麻や覚せい剤などの恐ろしさを若者に知ってもらうおと、新潟市保健所と市内の五つの大学、短大、専門学校が、薬物乱用防止に向けた啓発活動で連携している。全6回の連続講演会で依存症者の家族やかたて薬物依存症者だった依存症仲間回復施設の運営者が実体験を語り、「最初の1回に手を出さないで」と呼び掛けている。

「長男は、ちょうど昔から若者を守ることが狙

い。県内では2年前に長岡大の男子大学生が、県内の大学生としては初めて、覚せい剤を使用した疑いで県警に逮捕されている。

近年はインターネットなどで違法薬物が手軽に取引され、陶醉、興奮作用のある化学物質を乾燥させた葉に混ぜた「脱法ハーブ」が安価に販売されていることから、講演会は昨年の2校から今年は5校に規模を拡大し、計約2千人が参加した。

市保健所では「進学などで家族のものを離れる人も多い20歳前後の若年層に対し、薬物乱用の警鐘を鳴らす必要がある」として、今後も希望する教育機関への講師派遣などを進めていく予定だ。

中央区の専門学校生、渡辺舞さん(19) 〓長岡市 〓は「薬をやめることができない恐ろしさを感じた。絶対に使ってはいけないし、依存症者を治療できる体制がもっと整うといいと思う」と話した。

講演会は誘惑の増える夏休みに、大麻、覚せい剤、錠剤型の合成麻薬、違法ドラッグなどの被害から若者を守ることが狙